

昭和50年度年次晩餐会

—参会者300名越して盛況—



挨拶に立つ西堀栄三郎新名誉会員

恒例の五十年年度年次晩餐会は、創立七十周年記念晩餐会を兼ねて十二月六日東京・新宿の京王プラザで開催された。七十年というふし目の意義深い今回の会だけに、三百七人(うち招待者四人、非会員六人)という例年にない多数の参会者をみた。今回は名誉会員二人、永年会員十人が発表され、また記念事業としてのナンダ・デヴィ

イ縦走とカメット登山の二つの日印合同登山計画も明らかにされ、会場内にはようやく完成をみた『覆刻 日本の山岳名著』も展示されて約三時間、なごやかなうちに終了し、師走の夜に散会していった。(司会は浜野吉生氏)。

今西会長が冒頭「例年にくらべて非常に多くの人がお集まりになったことをうれしく思います」

と挨拶、まず年次晩餐会行事に入り、本年の物語者十三人の御冥福を祈って黙祷を捧げた。

今回の名誉会員は伊藤秀五郎、西堀栄三郎の両氏で、今西会長から、北海道の山の開拓者としての伊藤氏、またマナスル登山のパイオニアであり、南極第一次越冬隊、ヤルンカン京大土山岳会隊の両隊長をつとめた西堀氏の、それぞれの功績がたたえられ、名誉会員章が両氏(伊藤氏は代理)に手渡された。引続いて後記十人の永年会員が発表された(拍手)。

これにこたえて、名誉会員の西堀氏が挨拶に立った。戦前の副会長時代、戦後のマナスル登山許可取りつけの回想に入り、今西、榎両氏の示唆による当時の「ネパール入国は潜入のかたちだったが、国賓待遇を受け、国王から成功するまで日本隊に登山を許可する」の予期しなかった歓待の裏話。また南極行が日本山岳会の推薦によ

るものとし「一生山とは切り離せないことになってしまいました」との謝辞で結んだ。

また永年会員(在籍五十年)を代表して、吉沢一郎氏が「来年から会費がただになります」と、永年会員の「御利益」を述べて爆笑をかい、さらに「百年会員の会規をも作ってもらいたい」の提案に拍手を浴びた。なお欠席の伊藤氏からの祝電も披露された。

七十周年記念晩餐会に移って、榎有恒、藤島敏男両氏が、会史のなかでのかかわりあいを述べられたが、榎氏は「虎ノ門時代の本を戦災で焼いて申訳けなく思っております。その後お茶の水のルーム建設に藤島氏が奔走された」回想談と「きょう新宿駅からここ(会場)に来るのに一時間かかりまし

ナンダ・デヴィ縦走を成功させよう

乾杯。

渡辺兵力、黒石恒両氏からナンダ・デヴィ、カメットの両隊の計画が発表、支援を要望された。



昭和51年(1976年)

1月号(No. 367)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

- 晩餐会、記念講演会
昭和50年度年次晩餐会、参会者300名越して盛況……………(1)
800名が参加、盛況の記念講演
大阪会場……………(5)
特別寄稿
白い山(モン・ブラン)で祝った
80歳の誕生日(松村 高)……………(2)
山を歩く
葉山の訪れ(藤島 玄)……………(4)
海外通信
ボニントン氏からの礼状……………(6)
図書紹介
ヒマラヤ<人と辺境>……………(6)
なばかり南米大陸をゆく……………(7)
山の本販売目録、1975……………(7)
会員報告・委員会報告
創立70周年記念福岡、東九州、熊本
三支部合同集合報告……………(7)
第18回紅葉会報告……………(8)
第2回日印合同女子登山隊について
(カメット準備委員会)……………(9)
ナンダ・デヴィ縦走計画
(ナンダ・デヴィ委員会)……………(9)
その他
会員動向、会務報告、海外
ニュースなど……………(11),(12)

た」(笑)であらわす今昔の時代の開きに思いをはせ、そして「会員みなさんが、世界の山岳界に向かって巨歩を歩んでいけるよう」要望。また藤島氏は、「スポーツのクラブで、七十年を迎えているのは少ない」ことを指摘、会員になって五十六年になる同氏は「まったく精神的にしごかれ、多くの友人を得たことは大きな財産であり、入会していなかったらどうなっていたらう」と述べ懐かれた。同氏は昨年この会には不参加で、ガンセンターに入院中であつたが「あのとき舌ガンを噂されていたのを耳にしましたが、御期待に添えず……」と、相変わらずの「毒舌」ぶりを発揮された。榎氏は英山岳会百年祭に出席し、ロングスタッフ氏との会話を披露され、ロ氏は「五十年祭、百年祭の両方に出席できたことをよろこんでおられた。そういう方々も大勢いることはうれしいことだと思います」と、また藤島氏は「来年も出席してお目にかかろうと思います」と感慨をこめて結ばれた。

また遠来のマライニ氏と、中華民国山岳協会の陳守珪常務理事からの祝辞があった。

(片山金幸)

▽永年会員入会年一九二五年、括弧内は会員番号 二木信次(九一〇)、早川種三(九二二)、三田幸夫(九二四)、吉沢一郎(九三〇)、広瀬潔(九三二)、岡田喜一(九三三)、中原万次郎(九三七)、山井基福(九四〇)、八木橋

白い山で祝った八十歳の誕生日

松村 高

昭和四十七年七月、ハンブルクにいる長男(松下電器欧州営業所長)と、たまたま夏季休暇中にチバ製薬から研究指導を頼まれてパゼルにいた次男(米國ウィスコンシン大学生化学教授)とが相談して、親父の憧れているマッターホルンに登らせてあげようではないかと、家内と二人を欧州旅行に呼んでくれた。

まずマッターホルンへ

次男が案内役で、七月三十一日にツェルマットからロープウェイでシュヴァルツゼーまで行き、そこから三時間近くかかって根拠地のヘルンリ小屋へ行き一泊した。高度順応のトレーニングを全然やらずにいきなり登ったため、私も

豊吉(九三九)、馬場忠三郎(九四九)。

▽物故者 中原繁之助、水野善一郎、斎藤曼、秋山英二、渡辺利雄、三枝守博、中司文夫、氏家民雄、村尾金二、小沢利一郎、西井常造、伊集院虎一、石田吟松
*当日、大修館書店から三万円、利根川政次氏から二万円のご寄付をいただき、中華民国山岳協会からは花輪の贈呈があった。

次男も同行の角野君の三人とも一晩中頭痛で眠れず、朝三時に起きたら小屋前に新雪が三〇センチばかり積ってびっくりました。ガイドが、新雪ですぐ出かけるのは危ないからといって、明るくなってから出発。相棒の角野君は若いし高度順応も早いので先発して登ってもらったが、私は身長が一四五センチしかない老人だから速度は遅いし、ガイドのいう足場や手懸りに合わず、二度もスリッパしてガイドのザイルで宙ぶらりんになったりして、ソルヴェイ小屋(四〇〇三メートル)へ着く頃からソソロロ天候が怪しくなってきたので、命あつての物種と退却してしばらく小屋で待っていると、角野君は幸いに頂上を極めて無事

に下山し、シュヴァルツゼーのホテルで泊った。翌八月二日には、ツェルマットから、次男と嫁、孫二人と家内が登ってきて、ホテルのロビーでマッターホルンを眺めながら七十七回目の誕生日祝いをやってもらった。その折に私が「この次、八十回目の誕生日祝いはどこにしようかな」と言ったら、角野君が「君の初めて登った山は白山で、君の書いた白山のガイドブックも全国で読まれているのだから、この次はヨーロッパの白山、モン・ブランにしたら」といい、それはいいと賛成したのを息子が聞いていて長男に伝えたので、今年(昭和五十年)に入ってから長男が電話で「来るなら飛行機その他の用意をするから」とのこと。

さることになり、言葉の通じない心配もなく大助りとなった。そこで三十日には、まず第一にマッターホルで懲りているから高度順応のためロープウェイでエギュー・デュ・ミディ(三八四二メートル)へ登り、コル・デュ・ミディ小屋で一泊、三十一日にはモン・ブラン・デュ・タキユルへと歩き出したところ、もう一人の同行者曾我氏が頭痛激しく歩行困難で、途中からシャモニへ退却したが、ちょうど嫁の知人がホテルへ訪ねて来て、ロープウェイで嫁もいっしょにエギュー・デュ・ミディへ登るというので、もう一度高度順応のためにわれわれも同行したのであった。

いよいよモン・ブランへ

次の八月一日は、いよいよ目的のモン・ブランへと張切って用意していると、同じスネル・スポーツに勤めている鈴木氏が、登山電車に連絡しているロープウェイまで送ってあげると、中野、津田両氏と一緒にホテルへ迎えに来ていただいたので、八時頃出発。ロープウェイ終点で一時間ほど、高山植物の咲き乱れる原で、あたりの美事な景色を楽しみながら電車を待って乗った。電車は菌車をかみ合せて動く、私の学生時代に確氷峠で乗ったアプト式電車と、右下にはいたる所大きなクレパスが口をあけた氷河を見下しながら終

点ニー・デーグル(鷲の巣)から岩のゴロゴロした急斜面を登り出した。ようやくテート・ルース小屋(三一六七メートル)へ辿り着いた。少憩してグレート小屋めざして歩き出したが、小屋前からは雪渓歩きとなり、一時間ほどしてグレート小屋から下ってきた急傾斜の稜線の岩登りとなったので、マッターホルンを想い出した。しかしマッターホルンとは異なっており、赤ペンキで矢印や○印など書いてあるから、脇道へ迷いこむ不安はない。一時間半ほど登った個所で急に天候が悪くなり、霰まじりのミゾレが降り出したので、安全第一と登りを断念してテート・ルース小屋へ退却して泊った。小屋はだいぶ混んでいたが、幸い別室みたいところで寝かしてもらえてたすかった。食堂で寝た者も何人も居た。

二日は幸いに晴れていたし、今日はグレート小屋までだから気分も楽だった。起きて戸外の便所へ行ったら大正四年に行った白骨温泉の便所を思い出した。便所は急崖に棚を作って突き出してあり、はるか崖下へ大小便が流れ落ちて行くように作られていて、落着いて用足しがやりにくい感じは白骨の時とそっくりだ。白骨では、出かけた便が引込んでしまったと同行者が言っていたが……。

朝食をすませて八時少し前に出発。グレート小屋近くなると、傾斜



モン・ブラン頂上にて

右から中野氏、筆者、角野氏、津田氏

切れがして「しまった、登頂出来ないかもしれない」と不安になった。昨夜の睡眠不足と高度順応不足の結果らしい。そこで思い出したのは、昔から、動悸、息ぎれなどに即効性があるといわれている六神丸を念のため持っていたので、これを飲んでしばらく歩いたら息切れがなくなってきたので助

かった。この効果は、実効か精神的効果かは自分ではわからない。しかしまだ身体がだるく、目まい気味なのはやまないで閉口したが頑張った。

登りは中野氏が私とザイルを組んでくれたが、老人で短軀だからユックリ歩く。そのかわりあまり休憩はしないといって、歩行速度を加減してくれたのが大助かりになったことも今度の成功の一原因ではないかと思う。

この人は八〇歳ですよ

雪稜の上下をくりかえして登って行くうちに、ヴァロー小屋(四三六二メートル)へ着いた。ここまで頭痛をおさえて頑張ってきた曽我氏が頑張りきれずダウンしたので、余分な荷物を同氏に託して身軽にして登りをつづけたが、頂上からきている雪のナイフリッジは、両側が雪の急斜面で、歩く尾根幅が四〇センチくらいなので、降りてくる人とのすれ違いがこわかったが、ようやく切抜けて頂上に登ったのが八時五十二分。しばらくはボンヤリと「来たナ」と思ったが、同行の角野君が同時に登っていたスペイン登山家たちには「この人は八〇歳ですよ」と知らせたら、皆ビックリして集って来て祝福の握手攻めにあい、やっと成功したのだと実感が湧いて来て、嬉しさがこみあげてきた。

長い長い下り

絶好の天気恵まれ、針峰群にかこまれた頂上の眺めのすばらしさ、はるかに懐しのマッターホルンやモンテ・ローザ、ユングフラウなどの連山が見え、眼下にはシヤモニも見え、見飽きない。罐ジュースで一日遅れの誕生日祝いをして九時半に下山の途についたが登りにはあまり急とも感じなかった斜面が、降りてみるとなかなかの急斜面だったのに驚いた。

ヴァロー小屋で曽我氏と合体して降路をボソン氷河にとったが、途中で朝とは違って気温の上昇で雪がゆるんでいて、アイゼンに雪団子がくっつくのを払い落すのが面倒で、アイゼンを外して歩いた。今度はスリッパの連続で閉口した。いたる所に暗く底の見えない大きなクレバスが口をあけているので油断出来ず、クレバスを飛越えるにも短軀だから周囲をハラハさせたい。そうかといってスノーブリッジへうっかり乗ったら、割れて落ちるおそれがあるから飛ぶより仕様がなし。ピッケルで氷を削って足場を作って飛ぶのも厄介だが、命にはかえられない。目の前の岩峰上にそびえるグラン・ミユレの小屋が見えた時はホッとひと息ついたが下降路はまだ続く。ミディへのロープウェイの中間駅までの半分くらいを降っただけだから、前途は長い。

嬉し涙の別離

翌日はすばらしい大観のフルカ峠(二四三三メートル)のホテルから見るモンテ・ローザ、マッターホルンは素敵で、ホテルの横はロース氷河で末端が滝となって落ちているシブキをあびたりしてオーストリアのチロル地方へと入り、ハイジの泉で憩い、民宿を味わい、スキーでおなじみのアールベックを抜け、インスブルックをへてドイツの最高峰ツークシュピッツェ(この峰は風化はげしく道は崩壊はげしく、歩いて登ってあ



ボソン氷河にて／角野氏撮影

クレバスをとりこす筆者（中央は津田氏、右端は曾我氏）

事故のない 山登りを

ところで、マッターホルンとモン・ブランに登って感じたことは、マッターホルンは終始岩登りで、手を使わずに足だけで歩く場所ほとんどなく、岩に標識もなく垂直に近いところもあるから、ロック・クライミングの練達者なら登りは何とか、尖った頂上目当てに登れるだろうが、帰りは裾がひろがっているからコースを外れると元へ戻ることも先へ進むことも困難な岩場へ入りこんで遭難する危険があるから、安全を考えるならガイドを連れることだと思ふ。降りには、ガイドが、ライト、レフト、ストリートと岩場を指図しながら降りてくるのだから安全だ。われわれの登った日にも二人、翌日も二人遭難しているのが現実なのだ。ただし、一日三万円のガイド料と山の宿泊費は雇い主負担だ。

まり愉快そうでなく、降りは落石に足をとられそうでぶっそうだを訪れ、ガルミッシュ・パルテンキルヘン泊り、七日、ミュンヘンへ着き、十二時の時計が鳴ると市役所の塔で機械人形が踊るのを見て地下のピヤホールにて長男夫婦と別離の乾杯をして別れたが、飛行場への入口で子どもの親思いに感じ、思わず嬉し涙がこぼれた。飛行機でチューリッヒと乗換えでジュネーブへ出て遊び、夕方汽車でパリへ出て二日半遊んで帰国したが、同行の角野君がシャモニから航空便で送った写真と原稿が朝日新聞に大きく老人登山の新記録などと報道された反響が思いもかけず大きくて、伊丹飛行場の出口まで朝日テレビのカメラ班がニュ

ース写真を撮りにこられたには驚いた。山登りをとこす筆者（中央は津田氏、右端は曾我氏）

りであるが、岩でペンキに印があるから天気さえよかったら迷う心配はない。グーテ小屋からは頂上まで固い雪上を歩くだけだが、頂上手前のナイフリッジは慎重に歩き、特に降ってくるパーティとのすれ違いの時や風の強い時は、気をつけることと、コースを氷河にとるときは雪がゆるんでいるからスリッパに注意することと、スノーブリッジは気をつけないとクレバスに落ちこんで死体も上げられない危険がある。

ガイドブックを読むと、この二つの山は案外楽に登れそうな感じを受けやすいように思うが、甘く考えるのは禁物で、モン・ブランでもマッターホルンでもこの夏、日本人が死んでいるのが現実だから、天候が怪しいのに強行して二度と山へ入れなくなるような結果を招かないよう願ってやまない。

米寿の祝い：

私は過去六十五年間の山、五十

葉山の訪

■山を歩く

山形県には葉山、羽山が多い。山脈の尾根の延びた末端の端山の意味で、田の神と密接した山の神を、主として修験道で祀った山である。『山岳』二九年二号に「慶長

五年間のスキーで一度も事故を生じたことがないので、昭和四十九年十二月に、朝日新聞で六十五年無事故の模範登山と大きく掲載されたが、無事故と健康のおかげで当分は山もスキーもつづけれそう。八十八回目の誕生祝いほどにしようかと角野君と相談しているが、角野君の言うには、日本の白山は君の初めて山を覚えたところだし、白山登山のガイドブックも執筆しているのだから白山にしたらいいと言っているが、無事故で健康だったら、長く山もスキーも楽しめ、楽しい老後が恵まれたという収穫があるので、別にモン・ブランで八十回目の誕生祝いをやり、日本新記録をつくらう、世界をビックリさせようなどの大それた野心から登ったのではなく、登りたいから登ったのだが、新記録になって皆さんから騒がれ、気恥しい感じがしている次第である。今後山を愛する人々と共に山に親しみたいものである。

れ

藤 島 玄

年間の朝日連峰通路に就て（佐藤栄太記）がある。その朝日軍道の発着点の葉山（二一〇メートル）にしようか月山山塊の葉山（二四六メートル）かと考え、三〇年

も登りつづけた月山東麓の今神鉱泉にひかれて行ったが峠の通行不能に終わった。

九月六日、早朝新湯出発。全員荒井辰弥の車に斎藤平七と同乗。長井市で朝日葉山を是非一度はと想いながら先を急ぎ、大沼の浮島稲荷神社に詣で、有名な大沼にたずむ。連続三〇度を越す猛暑に浮島遊びどころか、色鯉が跳ねるだけだ。慶長五年、直江山城守兼続が葉山から朝日連峰の縦走路を伐開して大鳥池から庄内へ出た、といち早く最上義光に注進した大行院を訪れた。義光がこれを賞した文書が残っている。前述の佐藤記事の活字訳はひどい誤字、脱字があるので要注意である。

その夜は、朝日連峰の東山麓の古寺鉢泉朝陽館の祝事に招待された。主人の佐藤政雄は朝日小屋の管理を長くしたので知合いも多からう。長老の謡曲高砂で祝宴開始も盛大になり、鉢泉も清潔だ。九月七日、早朝に飛び出し左沢に戻る。葉山登山に必要な左沢、月山、尾花沢、楯岡の新旧五万分之一地形図を比較しよう。旧左沢図の黒森山▲六六メートルが残る、二五〇メートル南の▲六〇七メートルと大円院と、月山図の主稜の東側の登山道と葉山の▲が新図に消されて代って主稜の頂後に登山道が移され、畑からの登山道と山麓におびただしい車道が増加している。白岩から田代経由の車

800名が参加 盛況の記念講演大阪会場

道に乗ればいいのを、宮内から幸生經由にこだわり、海味近くから戻ったり、柳ノ沢を行き過ぎ、月山図まで行って戻ったり、柳ノ沢からどうなるかと心配した悪道が白岩道に接続してホッとしたり、

日本山岳会創立七十周年記念講演会(大阪)が昨年十月二十八日に堂島毎日ホールで開催された。当日は、終日雨が降り続く悪天にもかかわらず約八百名の参加者があった。

エントランス・ホールでは、旧友との再会を喜ぶ老岳友の声がそこかしこで聞かれた。

講演会は阿部和行氏の司会で始まり、今西錦司会長の七周年を祝う挨拶があり、中島道郎氏の講演に移った。中島氏は、スライドを使って、高所順応と高所障害について専門的な、そして非常に明解な話をしていた。私達山へ行く者は一度は聞くべき山岳医学の話であった。

榎有恒氏の話が関西地区で聞かれるということで、老人から高校生まで広い範囲の参加者があり、特に女性の姿が目立っていたのは氏の暖かい人柄をしのばせるものがあった。わずかに三十分という時間ではとても氏の半世紀にわたる山への回想は語りつくせず、かえって参加者に再

手間取って畑に着いたが、正午近くで留守の老婆と子供だけで話にならない。新図の登山道だと登っていたら、立岩の東側の地図になり登山道だ、と約一六〇メートルの分岐点で位置を確認する始末

度、氏の講演をお願いしたいという衝動をおこさせたほどだった。

本年は関西支部設立四十周年にもあたり、望月副会長には五月の支部懇親会に続き再度ご来阪頂き、常日頃支部活動に深くご配慮頂いていることに支部一同深く感謝いたしています。

●講演要旨

「高所順応について」

高所障害、なかんずく本邦における高所肺水腫について

中島道郎

今般日本山岳会七十周年記念講演会にあたり、今西錦司会長より講師御指名あり、とてもその任にあらずとは存じましたが謹んでこれをお受けした次第でございます。今日の演題は「高所順応について」となっておりませんが、高所障害、なかんずく高所肺水腫についてお話ししたいと思えます。と申しますのは、この高所肺水腫は日本の山でも

だ。

葉山は山麓から頂上が指呼できない。山腹に取付けばなおさらの同じようなゆるい起伏の連続で水場は全然なかった。畑から東へ一・二キロの大円院は今はなく、

毎年何人かがこれにかかっており、ヒマラヤ、アンデスなど海の向こうの山での出来事では決してないというのを知っていた。ただきたいと思うからであります。

*

高所が人間にとって不都合なのは気圧が低いからで、海拔五四〇〇メートル付近で $\frac{1}{2}$ 気圧、八二〇〇メートル付近で $\frac{1}{3}$ 気圧になり、それとともに酸素も平地の $\frac{1}{2}$ に減るわけです。ところが地球は赤道が膨んだ回転楕円体で、地球を取巻く大気の層は赤道付近がさらにふくらんだ形になっており、従って大気圧は赤道付近で高く、極付近では低いわけで、北緯28度のエベレストよりも、北緯63度のマッキンレーの方が高度影響は強く出ます。高所では気圧のほか気温や風速なども人体に影響致します。

*

それに対してわれわれの体では呼吸が深く速くなり、心拍数もふえます。呼吸が激しくなる

畑と小屋を残すだけだが車道はある、と聞いた。そこから来る長坂道と主稜上の約一三五メートルで接続した。お花畑という藪に囲まれた小湿地で分岐点から緩登のまづナ林を抜けたのだ。月山から

ことによって肺内の炭酸ガスは盛んに体外へ排泄され、その減少分だけ酸素は余計に体力に取込まれます。心拍数が増加し、心臓から拍出される血液量が増加すればそれだけ血液の酸素運搬能が増加します。また赤血球がふえ、ヘモグロビン量も増加します。ヘモグロビンは肺で酸素と結合して酸化ヘモグロビンとなり、血中で組織に運ばれてそこで酸素を放出します。これを酸素の解離と言いますが、呼吸が盛んになって体内の炭酸ガスが失われ過ぎますと、血液がアルカリ性になり、解離度が低下して組織へ酸素が放出され難くなります。それは人体に不利ですから腎臓からアルカリ分が多く排泄されるようになってまいります。こうした一連の変化によって、人間は高所に順応出来て行くと説明されていま

す。

*

さて次に高所肺水腫でありますが、本邦でも昭和41年、荒井氏がその第一例を報告して以

朝日連峰につづく赤見堂山の方へ眼をやった。

小僧森と一四〇七メートル峰の登り口に書いてある。私は東側の堀み道へ入った。古い荒れた道はすっかり踏まれて残っているが、

来、北原氏や中村氏などの報告が続く、決して稀な疾患ではないようです。海拔二九〇〇メートル以上で、肉体的にかなり無理な行動をしたあと、入山第二日ないし三日目に発症する例が多く、息切れ、胸痛、咳、痰(時に血痰)、悪心、嘔吐、倦怠などを訴え、さらには意識障害に陥る場合もかなりあります。(なかには呼吸器症状がなくいきなり意識障害に陥る例もありです)。原因は肺高血圧症と説明されていますが、そうなるメカニズムはまだよくわかっておりません。同一人に繰返し発症する例少なからず、体質が大きな要因を占めているようです。

*

対策は少しでも下へ、一刻も早く降ろすべくで、いたずらにヘリの来援を待つて無為に時を過ごしてはなりません。予防は無理な登山計画によって行動しない、の一語につき、常に自分の体に合った慎重な登山が望まれます。

土崩れと背を没する竹藪草藪にてこずりながら約一四三〇メートルの中ノ峰を巻き、葉山の南鞍部へ出て、緩登ししばらくの大坪石約一四四〇メートルへ出たら二人が待っていた。

葉山に▲がなく、入って行ったら大森山の標札だけだ。頂上の東の巻き道で先へ出ると葉山神社が小さく見えた。小鞍部に湿地、乾いた小池、偃松の一群れ、草原に登ると鳥居、板状安山岩の露地にライオンズクラブ寄贈の鐘と、コンクリートブロックの葉山神社が鎮座、中に大黒天の石像が祀られ、供物がたくさん上っていた。真西にあたる月山はシルエットになり、燃える陽が沈みこむように傾いている。烏帽子岩の上の峰の古御室山（一三六〇メートル）



ヒマラヤへ人と辺境

白水社

この表題の下に発行される予定のシリーズは全部で七冊であるが、いままでにそのうち四冊が発行されているので紹介しておきた

こそ標高が低くとも葉山奥ノ院であらうと思いを残したが、月山にある高山植物のほとんどを小群落の散在ながらみとめたのに満足して、あわただしく往路を急いだ。月山に陽は没しても、一步毎に暑さは加わり、分岐点へ戻った時は夜となった。新図に示された道に入ったが、釣瓶落しの急坂となり、小道に草がかぶって、ライト一つの三人は止まることを知らぬ急降下に閉口した。山日記を見る

このシリーズは諏訪多栄蔵氏が監修しているが、「ヒマラヤ」を純粹な意味よりもずっと拡張して、中央アジアあるいは中国の辺境をも意味して使っている。そして、どちらかといえば、登山よりはむしろ探検に力点をおいて、本をえらんではいる。したがって、取扱っている内容は、現在においてもあまり知られていない地域のことである。シプトンのものは、東トルキスタン地方、ティルマンのものは、パミール、キングドン・ウォードのものは、チベットとビルマ国境付近、スネルグロヴのものは、西ネパールというぐあいである。その意味では、探検史的興味としてばかりでなく、現在における未知の領域に関するインフォメーションとして興味があると思う。

い。

・シプトン『ダッタンの山々』

（水野勉訳）昭和五十年五月二十日、定価一六〇〇円

・ティルマン『カラコルムからパミールへ』（薬師義美訳）昭和五十年六月二十日、定価一六〇〇円

・キングドン・ウォード『青いケシの国』（倉知敬訳）昭和五十年八月二十日、定価一九〇〇円

・スネルグロヴ『ヒマラヤ巡礼』（吉永定雄訳）昭和五十年十月二十日、定価二〇〇〇円

・スネルグロヴ『ヒマラヤ巡礼』（吉永定雄訳）昭和五十年十月二十日、定価二〇〇〇円

シプトンの『ダッタンの山々』は、名文の誉れ高い彼の著書のうちでも特にすぐれたもので、若々しい文体の中にも、落着いた風格がにじみ出ている。ティルマンの『カラコルムからパミールへ』は、パミールのワクジール峠越えあたりがもともと興味を抱かれるが、著者の皮肉まじりの、古今東西の名句、格言を引用しての文章は独特の味わいがある。キングドン・ウォードの『青いケシの国』は、著者の第一作であり、若々しい探検家の息吹きを感じ

ボニンントン氏から

礼状

昨秋、エヴェレスト南西壁の登攀に成功した英国隊の隊長ク

リス・ボニンントン氏より、このほど大塚博美氏宛、左記のような来信がありました。日本のマウンテンアおよびエヴェレストへの礼状ですので、原文のまま掲載します。

Dear Mr. Ohot Suka,

I should like to thank you very much indeed for your kind letter of congratulations. In our turn we owe you and all the Japanese mountaineers who ventured on Everest our own thanks because in the case of a problem as vast as the South West Face of Everest, one only has any chance of climbing it at all after several attempts and the joint experience of all who have climbed there. I should therefore like to thank you and the members of your team for everything that we have learnt from that experience, and also for the many instances of direct help and information we have had from Japan.

With very best wishes,

Yours sincerely,

Chris Bonington

じとることができる。かれは植物学的探検が目的であったが、地理学的な調査もつねに怠らなかつた。原書は最近再版が出ているが、初版は稀覯本である。

スネルグローヴの『ヒマラヤ巡礼』は前の三冊とはいささか趣きを異にしていて、どちらかといえば、文化的探検の本といつてよいかもしれない。西ネパールの仏教研究紀行であり、著者も著名な仏教学者である。

訳文はこの四冊とも読み易いが、ティルマンとスネルグローヴの訳では、前者はその独特な文体に、後者はその仏教的内容に、訳者は苦心されたことであろう。

(T・M)

女ばかり南米大陸をゆく

森 宏子 田村協子
小倉童子 大賀愛子 著

著者ら四人による一九七四年十一月二十三日から七五年三月十六日まで約三ヵ月半にわたる「南米大陸女子縦断隊」の報告書である。ベネズエラ、コロンビア、エ

クアドル、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチン、ブラジルの南米八カ国、三万二千里にわたる冒険ドライブの記録だが、むろんそんなことに勇敢な四人の女性たちによる南米大陸走り回りの記である。山登りのことは、アコンカグア

が都合で中止となつてしまったため、ほとんど書かれていないが、プンタアレナレスでシブトンに会ったり、モレノ氷河を見物したり、そしてパタゴニア・アンデスの名峰フィッツ・ロイを雲間に眺めたり、まことに楽しそうな自動車旅行の見聞記がつづられている。

それにしても、女性いよいよ強しという印象で、われわれ老人はただあれよ、あれよと面白さと強引さにつられて読むばかりであつた。

昭和五十年九月、読売新聞社刊
三〇八ページ、B 6版、九八〇円

(山崎安治)

山の本販売目録・

一九七五

茗 溪 堂編

山の古書については、いろいろな方が関心を持たれているが、山の新刊書のちよつと古くなったもので、まだ手に入るものというところ、とまどうものである。

最近、どういふわけか、一般の新刊書店で、山岳図書に力を入れて揃えているところが非常に少なくなつた気がするし、いままでかなり充実していたと思つていたところも軒なみにがたりと質がおちてしまつてゐる。銀座の近藤、旭屋、渋谷の大盛堂などには見るに耐えないし、神田の三省堂も大したことはなくなつてしまつた。新宿

の紀之国屋など、いつの間にか裏手の別館に売り場が移つてしまつて、こゝもレジャー関係のものが幅を利かしている有様。

その中では日本橋の丸善がわずかに力を入れているようだが、何といつても神田の茗溪堂の三階の山の本のコーナーは、東京広しといえどもちよつとこれだけ山の新、旧刊の揃つてゐるところはほかに見当たらない。別に茗溪堂の提灯を持つわけでは決してないが、事実なのだから紹介して置くわけだ。

とくに地方で出版されたもの

●会員報告、委員会報告

創立七十周年記念福岡、

東九州、熊本三支部会

同集会報告

昭和五十年は本会創立七十周年にあたるというめでたい年であるので、その祝賀行事を九州内にある福岡、東九州、熊本の三支部会で行うことになり、これはひいては私たち九州に在住する会員相互の親睦と連帯を深めることになると思ひ(三支部会で行う集会是初めてである)、熊本支部から提案し、支部間で話し合ひがすすみ、会員各位へ御案内申し上げたところ四十六名の出席があり、盛会に終つたことをまず喜び、御協

や、一般に市販されないものも並べられてゐるので、JACのルームに寄られる前、ひまがあつたら立ち寄られたらよい。先ごろ発行された『山の本販売目録』は、現在茗溪堂で入手出来る、山と探険をテーマとした目録であり、海外登山の記録や報告書などもリストアップされている。書名索引、著者名索引も付されており巻末には島田巽氏の随筆「よい山の本」が掲載されている。

一九七五年四月、茗溪堂発行、
B 6版、一九六ページ、九〇〇円

(山崎安治)

力下さつた各位に感謝申し上げたい。なお東京から今西会長、望月副会長、吉沢一郎の各氏が見えになり、御多忙な中を御苦勞さまでした。

記念行事は十一月十五日大分県玖珠郡九重町湯坪の新日鉄九重山荘で行ひ、午後五時に集合ということであつた。当日はどんよりとした曇り空で、久住、飯田の両高原はよくみえ、紅葉で見頃であつた。

今西会長、望月副会長は十一時三十五分大分空港着の便で着かれ、東九州支部より野口支部長、西諒氏のご案内で直ちに国東半島の両子山(七二一m)へ登山され、晩秋の豊後路を一路九重山荘

へ、午後五時半過ぎ元気な姿を見せられた。吉沢一郎氏は福岡に着かれ、末松福岡支部長らと車で阿蘇経由で同時刻頃山荘に着かれた。阿蘇では仙酔峡から高岳北尾根の鷲ヶ峰の岩場をくわへ、この元気のいい吉沢さんらの到着であつた。

懇親会は午後六時半から熊本支部西沢の司会で開き、地元三支部を代表して、末松福岡支部長の挨拶、続いて今西会長の挨拶、そして野口東九州支部長の乾杯の音頭でビールが注がれ開宴に移つた。

酒が少し回つたところで各支部ごとに自己紹介、各人一言ずつ自分のことにふれて一面を披露してもらつた。宴会は午後八時までで終り、八時半から席をあらためて今西会長ほか本部の二人からそれぞれ有益な講話を約一時間にわたつて聴いた。皆夜がふけるのも忘れ熱心にきき、意義深い記念集會を終り、翌日は久住山と近くの涌蓋山に分れて記念登山を行った。

(西沢記)

▽出席者

今西錦司、望月達夫、吉沢一郎、福井正吉、福岡支部阿部克雄、倉智清司、末松大助、田代実、古賀康義、琴尾泰典、権藤太郎、新貝勲、東九州支部野口秋人、木本善重、姫野和記、西諒、三重野勝彦、佐藤浩幸、大力博、高並努、山本康文、武井栄四郎、熊本支部奥野正亥、三谷孝一、玉名金助、宮崎

豊喜、西沢健一、馬場猛、山代末満、本田誠也、多田隆峰、古川房雄、河瀬博文、会員外一三名（順不同）

創立七十周年記念登山

創立七十周年記念行事として福岡、東九州、熊本の三支部合同による記念登山は、十一月十五日の記念祝賀懇親会に引きつづき、翌十六日A B二班に分れて久住山（一七八七m）と涌蓋山（一五〇〇m）で行った。

久住山の記

天候はここ数日前から低気圧の停滞で好転せず、この日も前日同様にすぐれぬ気配、早朝からどんよりと曇った天候であった。そうしたことで記念登山は希望者のみにして、朝八時半頃からそれぞれ山へ行く者、山を下る者、気ままに分れて散って行った。今西会長も熊本空港発十二時十五分の便に間に合わせるため早々に発された。吉沢一郎さんも福岡経由帰京のため末松福岡支部長らと一緒

に山を下られた。望月副会長のみ久住山へ登られることになり、A班に入っていたことになった。

下りはガスのためよほど注意しないとも迷うかもしれないと思いついても、私の先導が悪くてついに迷ってしまった。草付の中を道は、次第に左下へと下るのであるが、いつのまにか御池へ行く道に入っていたらしく急に登りになった。すぐ気がついて避難小屋へ行く道がわかったが、こんなときはパーティがはなればなれにならないことである。

コースは牧の戸峠（一三三三m）から香掛山頂を経て西千里ヶ浜へと向った。久住山へ登るには比較的に楽なコースである。牧の戸を九時半出発、メンバーは望月副会長のほか東九州支部から野口支部長、木本、姫野、武井、熊本支部から西沢、古川の七名が参加（ほかに二名香掛山頂まで同行している）、登りはじめると急に外気が

は雨をさけた若い登山者十数人の先着がいた。下山は登山口の駐車場の関係で二手に分れ、望月、西沢、古川の三名は北千里ヶ浜からスガモリ越えて下山、残りの者は再び牧の戸へと帰ってもらった。

少憩の後頂上へと向ったが、このあたりから急な登りになり、小雨まじりの風が強まってきた。最後の登りとはいへ風雨の中では次第に歩調がみだれてくる。さすが多年経験を積んでいられる望月さんの歩調はみだれていない。風雨が強くても話もできない。頂上には十一時四十五分に着いた。牧の戸から二時間十五分である。望月さんには九州の山として初めて登られた久住山頂は、濃いガスに包まれてあいにく視界はきかない。ものの五分とおらず頂上をあとし

避難小屋に着いて昼食、小屋には雨をさけた若い登山者十数人の先着がいた。下山は登山口の駐車場の関係で二手に分れ、望月、西沢、古川の三名は北千里ヶ浜からスガモリ越えて下山、残りの者は再び牧の戸へと帰ってもらった。

天気はよければ北千里ヶ浜から見ると硫黄山の一見異国的な風景も全然ガスのために見えない。大きなケルンを伝いながらスガモリ越えを越し、旧硫黄搬出道路を長者原の九重登山口へと下りた。午後二時四十分であった。（西沢記）

霧の山路といえは何かムードを覚えさせるが、馬背、急坂、石ころ、横なぐりの霧と風、涌蓋の歓迎は少々荒っぽい。一步一步を喘ぎながら上へ運ぶだけである。体調不調をまざまざと覚えさせられた登りだったが、やっと頂上の一

涌蓋山の記

一行は東九州支部二名、福岡支部二名、熊本支部三名の計七名である。大岳地熱発電所に車を置き、車道を少し登り、疥癬湯のところで対岸に渡った。

この道は少々変っていて、竜泉閣の建物の真中を潜り抜けてい

る。指道標を疑う人も多いと思う。それに建物も（失礼だが）名に即しないし、不動明王と河童の像の組合せもわからない。いずれにしても戸惑うばかりである。細い急坂を少し登ると台地に出る。このあたりの緩斜面は牧場になっ

てお天気は怪し気だが、誰も引き返す気はなさそうにどんどん登って行く。柵を越し黒牛の群の中を

通って、夫婦越を過ぎいよいよ最後の登りとなると雲の中に入ってしまった。

霧の山路といえは何かムードを覚えさせるが、馬背、急坂、石ころ、横なぐりの霧と風、涌蓋の歓迎は少々荒っぽい。一步一步を喘ぎながら上へ運ぶだけである。体調不調をまざまざと覚えさせられた登りだったが、やっと頂上の一

角に達した。疥癬湯から一時間四十分を要した。

広い頂上は吹きつける風と霧で眺望はおろか方角さえ定かでない。石の祠や三角標などを探したりしていると、別のグループが十名程登って来て、標柱を囲んで万才をやっている。そうこうしているうちに、小雨

がパラつき出したので雨具を借用し弁当を開くという大分組を残して先発することにしたが、吹き上げる風と霧に雨具も眼鏡も形なし、遮二無二急斜面を下り馬背を過ぎるとやっと雲の下に出た。

ウインパーは眺望を目的に山に登らないと書いてある。私もそうした一時期を持ったこともあったが、眼下に暖かそうな日差しを受けている筋湯の展望を楽しむのもあながち悪いことでもあるまい。あとはただ歩くだけ、どんどん下って一足早く下山した玉名氏達に追いついた。

金竜閣の裏手来ると、二階の窓から思いもかけない三谷熊本支部長が声を掛けてきた。見ると裸で温泉から出て来た処だという。早速部屋に入り込んで入浴やら屋食やら、やっと落ち着いた気分になって一休みの後、それぞれ帰途についた。

何かあわただしい山歩きで、各地の人達と話もろくに出来なかったことは、心残りであった。

熊本組は更に飯田へ下り、九酔溪の紅葉の盛りを観賞、長者原、牧の戸峠を経て帰熊した。

（奥野記）

第十八回紅葉会報告

一〇五〇メートルの標高にある山住神社（静岡県磐田郡水窪町）参籠堂で昨年十一月八日懇親会を

開催。九十歳の松本善二氏、八十一歳の又木周夫氏も元気に参籠。山住神社大祭の一週間前でもあるので、障紙も張り替えられ掃き清められた境内には、一八〇〇年の大杉が天に突き立つ神域。都会では味わぬ山間の手料理に満腹。地で採れたソバ粉で作ったソバも出、会員牧野氏の畑で採れた大根、イモのおでんもおいしい。御夫婦で一日がかりで作ってくれたおでん種。酒呑みもおかわりする程のうまい汁粉。

会員の自己紹介の後懇談に入り、土地の芸能、田楽のフィルムを見て会を閉じる。翌日は常光寺山へ登る。八十一歳の又木周夫氏も若者と同じスピードで登られたのは驚く。山頂で水窪へ下るパーティーと、気田川に下るパーティーに分れる。めずらしく二日間晴天にめぐまれ、粉雪をかむった木曾御岳、恵那山も望遠出来た。京丸山や竜頭山はすぐ手近かな尾根続きである。

〔参加者〕松本善二、又木周夫、山崎金次郎、野口末延、鶴岡元之助、松本熊次郎、佐藤佳年、小林重一、名見耶達男、神奈川甚吉、成瀬岩雄、渡辺嘉男、渡辺公平、沼倉寛二郎、網倉志郎、矢沢義弘、川北仁、松本慎太郎、小原晴子、斎藤かつら、岡部みち子、山本朋三郎、川端信治、稲垣一郎、荻野恭一、斎藤時雄、牧野衛、石間信夫、山口亮、水野公男、池上和男、田辺恵造、久保田保雄、長田義則、鶴見敏彦、袴田夏子、加茂弘子、兵藤栄子、又木氏添人、地元関係三名。以上四十二名。

(山本記)

第二回日印合同女子登山隊について

登山隊について

第一回の日印合同女子登山は、当時の三田会長はじめ会員の皆様のご尽力で一九六八年春実現し、インド、チャンバ地域のカイラシユ峰(五六五六メートル)にインド六名、日本四名の全員が登頂いたしました。その後インド登山財団のサリーン氏はじめインド側メンバーとの連絡も絶えず続けられており、七年を経て第二回目の合同登山を実施することになったもので、このカメット登山が、さらに第三回、第四回と若いメンバーに引継がれていくことは、婦人懇談会の念願のひとつといえます。

カメット峰(七七五六メートル)はガルワル・ヒマラヤのチベットの国境附近に位置し、一九三一年にスマイス隊が、その後一九五五年にインド・ジャヤール隊が、いずれも東カメット氷河からアビガミン峰とのコルに達し登頂に成功しております。最近ではインドが一九七一年グジャラート隊、一九七二年アッサム隊の二隊を出しておりますが、登頂できず、高度順応に失敗したためといわれています。

す。インナーラインの北側であるため、インドとの合同登山でなければ許可の得られない美しい山であります。

既報の通り婦人懇談会ヒマラヤ研究会を解消し、十月三日、日印合同女子ヒマラヤ登山準備委員会および事務局を設置いたしました。インド登山財団より合同登山実施に対する会長宛正式文書も到着し、現在事務局担当が準備を進めております。

委員会における確認事項およびその後のインドの連絡内容概要は下記の通りであります。

＊登山計画 五月初旬日本出発。マラーリより一週間のキャラバン後五月下旬東カメット氷河上四七五〇メートル地点にB建設、六月いっぱい登山期間とする。C3(五九〇〇メートル)をABCとし、C6(ミーズ・コル七一〇メートル)より頂上アタック、七月初旬BC撤収、下旬帰国の予定。

＊シェルパ 十名(コック一名を含む)
＊隊員 インド側六名、日本側五名。日本側隊員候補は、須田紀子(会員番号五三九〇)、奈須文枝(同七二四六)、清水春美(七二四九)、高本信子(七六〇四)、河上絃子(七九九七)。

インドからは現在七名の候補者リストが来ており、十一月中旬に六名を決定する。

＊費用 日本側予算七五〇万円。隊員一名当り一五〇万円の経費はできるだけ負担額を少なくするため募金活動を行う。

来春は日本山岳会からナンダ・デヴィ(男子)、カメット(女子)の二つの日印合同隊を送り出すことになりました。事務局相互の連絡を密にしてスマートな山登りができるよう努力したいと思っております。またインド登山財団と日本山岳会の友好関係もこれまで以上に緊密となっております。この面でも成果を挙げたいものと存じます。

二つの日印合同隊に対する会員の皆様のご指導、ご支援を心からお願い申し上げます。あわせてご意見、ご提案、情報などを事務局宛お寄せくださいますようお願いいたします。(カメット準備委員会)

ナンダ・デヴィ

縦走計画

ナンダ・デヴィ委員会

計画の発端から遂次「山」でお知らせしていますナンダ・デヴィ縦走計画も、一月下旬からの荷造りを目前にして、食糧や装備の買付けと資金調達に目の廻るほどの忙しさである。そんな中での明るいニュースをお知らせします。

＊朝日新聞社の後援決定

最近では報道関係が、海外登山に対して後援することはむずかしく、かつ少なくなっているにもか

かわらず、今回のナンダ・デヴィ縦走計画の価値と意義をご理解いただき、朝日新聞社の後援が決定したものである。さきの文部省後援と併せて、ナンダ・デヴィ縦走計画は強力な後援ができたわけである。

＊資金の調達ご協力をお願い
十二月号で、計画予算と資金計画をお知らせしましたが、現下の経済環境は資金調達をいじめるしく困難にしております。会員各位のご協力をお願いいたします。ナンダ・デヴィ委員会は左記の要領で募金活動を行なっておりますので、ご協力をお願いいたします。

一口 千円

五口以上ご協力いただきました各位には、現地より日・印全隊員署名のナンダ・デヴィ峰ポスト・カードをお送りいたします。

＊訂正

会報三六五号、アルバータ登頂五十周年記念会報告中、故細川護立氏の実妹川崎久子さんは、岡部長量氏の実妹でございます。つっしんでおわびいたします。

昭和五十一年一月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一

利根川商事株式会社

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 大森久雄

(813)二八六(代表)

振替口座東京三二四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店

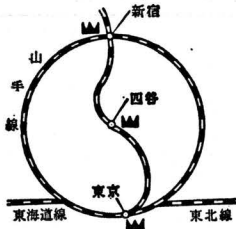
●買いやすい
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島 3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・8680番



かたるぐシンティ
でんや 281-3456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

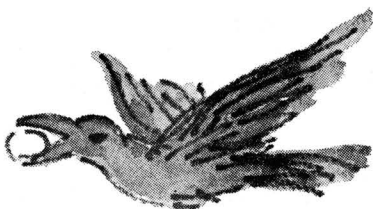
イワタ

東京都中央区日本橋通 2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座 3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座 3-4-6 (561)0966・スキー店
大阪店・北区曾根崎上一丁目 47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町 1-4 (28) 3440



坂本直行

厳しい開拓のクワを持つ傍ら、好きな山に登り、美しい北海道の自然を心ゆくまで眺めて、描き綴った楽しい作品集。

新刊

山・原野・牧場 A5判 134頁 口絵淡彩
¥1,500 200

—ある牧場の生活—

山のことはあまり出て来ないでも、ほんとうは牧場に立って山を眺めている人の気持を書いたものである。ほんとうの山を知っている人の日記である。そういう意味でこの本は山の本であり……山崎春雄

画文集

雪原の足あと

〈雪原の足あと〉は直行の生涯の一つの転機を記念する本である。つまり30年間離したことのないクワと決別して、一人の画家としての直行がここから出発するのである。……松方三郎
B5判 206頁 ¥3,800 300

原野から見た山

右手の柏の樹林の上には南日高の山群が、とんがった美しい起伏を見せていた。僕ははじめて見る原野からの山の姿を幾枚かスケッチした。それは実に心のたのしいものであった。……本文より
B5判 144頁 ¥4,200 300



開墾の記 A5判 230頁 口絵淡彩
¥1,400 220

あのすさまじい重労働と貧乏に耐えて過した30年は、何によって支えられていたのだろうか…それは私をとりまく自然の美しさと、私を打ちのめした自然の厳しさであった…もう一度当時のようなエネルギーと情熱が欲しい……再版の言葉より

淡彩画えはがき 6枚1組
北海道の山・原野・花 ¥300. 40

茗溪堂

東京都千代田区神田駿河台 2-1
振替東京 8-24723
最寄り書店又は直接ご注文下さい

会務報告

11月理事会

(11月7日午後6時本会ルーム)

▽出席者 今西会長、織内、望月各副会長、浜野、高遠、山本健、近藤、小倉、山本良、大倉、田村俊、神崎、橋本、田村安各理事、小原、浜野、折井、宮下各評議員
▽委任 大森、皆川、原、浜口、浅田各理事
▽議案
・ナンダ・デヴィ遠征計画進捗状況説明 (渡辺兵力)
隊員予定者決定、文部省名義後援許可、これから募金活動に入るの協力をお願いしたい
了承
・カメット遠征計画進捗状況について (小倉)
第二回日印婦人合同登山ということ親善を主とする
了承
・年次晩餐会について (浜野)
記念品(70周年記念)を会場で販売する。晩餐会招待者について
了承

▽報告事項
・山岳編集 (近藤)
70年号に一般会員より原稿募集
山研 (小倉)
本年度は利用者増加。しかし運営費の収支は赤字であるので来年度はいつその利用をお願いする
(山本良)
・自然保護 (山本良)
環境庁との懇談を開催した
(山本良)
・医療 (山本良)
登山者向け小冊子執筆決定
(神崎)
・集会 (神崎)
十一月二十日に会員懇談会を開催

ルーム日誌

(50年11月)

4日(火) 婦人ヒマラヤ研究会
5日(水) 学生部
6日(木) ナンダ・デヴィ委員会
7日(金) 理事会
10日(月) 富士山講習会準備会、集会
12日(水) 学生会
13日(木) 海外連絡委員会、ナンダ・デヴィ委員会
14日(金) 評議委員会
15日(土) 富士山講習会準備会
17日(月) 集会委員会、婦人ヒマラヤ研究会
18日(火) 学生会
19日(水) 学生会、会報委員会
20日(木) ナンダ・デヴィ委員会、集会(会員懇談会)
25日(火) 図書委員会
26日(水) 学生会、婦人ヒマラヤ研究会
27日(木) ナンダ・デヴィ委員会
28日(金) 自然保護委員会、ナンダ・デヴィ委員会
29日(土) 学生会
11月中来室者四八五名

会員異動

支部変更
六五四八 津金 邦太郎 その他
七五七五 平井 和雄 東京
五七九九 村井田 博 その他
物故者
一〇一八 小沢利一郎(50・10・21)
四二六 西井 常造(50・11・5)
三九〇二 伊集院 虎(50・11・18)

小集会の報告

集会委員会

第三二回

明大チニレン・ヒマール登山隊
日時 8月20日(水)午後6時半開会
場所 日本山岳会ルーム
盛夏のなか二十六名の会員を迎え、明大長谷川氏を招いて、スライドを中心としたチニレン・ヒマール報告会を開催しました。

第三三回

専大ヒマールチニレン登山隊
日時 9月10日(水)午後6時半開会
場所 日本山岳会ルーム
専大の小見氏を中心に三十二名の会員を迎え、スライドをまじえ、活発な質問を加え、ヒマールチニレン報告会を行いました。

第三四回

日本女子エベレスト登山隊
日時 9月20日(土)午後6時半開会
場所 私学協会(市ヶ谷)
日本女子エベレスト隊と共催で行ないました。歓迎会等と報告されており、初めのため一五〇名ほどの出席。久野隊長の経過報告、田部井登頂隊員のユーモアに富んだ登頂報告、各隊員の一言スピーチの後、映画、スライド等楽しい会に終始した。

第三五回

都岳連ダウラギリI峰登山隊
日時 9月30日(火)午後6時半開会
都岳連の雨宮氏を迎え三十名の会員参加のもと、スライドを見ての説明によりダウラギリI峰の登山報告会を行いました。

第三六回

蓼科山現地集中登山
日時 10月18日(夜行) 19日(日)
場所 北八ヶ岳蓼科山

あいにくの悪天にもかわらず、十九名の会員の参加のもとに、秋の霧雨けむる北八ヶ岳のハイキングを楽しみました。

第三七回

静大テラムカンリ登山隊
海外ニュース

開放されたパミール

およびコーカサス(ソ連邦)

海外連絡委員会

後述のインフォメーション・レターの通りパミールおよびコーカサスが開放され、UIAA参加団体にその通知が出された。これらの地区でのキャンプ参加要領も、同レターに記されているので、これに従い参加希望団体はソ連IMCのアドミニストレーションとて、仮申請を送付し、そのコピーを海外連絡委員会に送付してください。

なお(1)2コムニズム峰とゴルジエネフスカヤ峰は、昨年に引き続き一九七六年度も日本山岳会高所登山委員会が申請済み(山)12月号参照)です。(2)1コーカサスに対して申請を行なってください。

「インフォメーション・レター」

ソ連山岳連盟
一九七六年夏期にパミールとコーカサスで二つの国際山岳キャンプ(I・M・C)が開催される。外国のアルピニストはソ連山岳連盟によって定められたルールに従い、定められた金額を支払えば、このキャンプに受け入れられる。

(1)IMC「パミール」
次の二つのプログラムの通り7月10日より8月15日まで行なわれる。

(2)1コーカサス

二十七日間IIベース・キャンプで高度順化。レーニン峰およびその周辺の山々の登攀。

五日間IIIヒヴァープハラーサマルカンドの旅。

三日間IIモスクワ滞在。

以上三十五日間のソ連邦滞在費用は一〇〇〇ドル。この中に食費、ホテル代、ベース・キャンプでの諸費用、医療費が含まれる。

(1)2 コムニズム峰とゴルジエネフスカヤ峰

七十五日間IIレーニン峰のベース・キャンプで高度順化。

二十五日II間IIヘリコプターでコムニズム峰およびゴルジエネフスカヤ峰のキャンプへ。同二峰の登攀。三日間IIモスクワ滞在。

以上三十五日間のソ連邦滞在費二二〇〇ドル。

日時 10月30日(火)午後6時半開会
場所 日本山岳会ルーム
静大の白石氏を迎え三十名の会員の参加のもとに、スライドを見ながら、活発な質疑応答を加えた。テラムカンリ登頂報告会を開催しました。

二十七日間IIベース・キャンプで高度順化。レーニン峰およびその周辺の山々の登攀。

五日間IIIヒヴァープハラーサマルカンドの旅。

三日間IIモスクワ滞在。

以上三十五日間のソ連邦滞在費用は一〇〇〇ドル。この中に食費、ホテル代、ベース・キャンプでの諸費用、医療費が含まれる。

(1)2 コムニズム峰とゴルジエネフスカヤ峰

七十五日間IIレーニン峰のベース・キャンプで高度順化。

二十五日II間IIヘリコプターでコムニズム峰およびゴルジエネフスカヤ峰のキャンプへ。同二峰の登攀。三日間IIモスクワ滞在。

以上三十五日間のソ連邦滞在費二二〇〇ドル。

(2)IMC「コーカサス」

(2)1 七月一日〜七月三十一日

(2)2 八月一日〜八月三十一日

以上の二シフトで行う。

二十六日間IIエリブルスを含む周辺の山およびウシバ、シヘリダ、チャトイン等の登攀。

二日間IIエリブルス周辺のエクスカッション。

二日間IIモスクワ滞在。

三十日間のソ連邦滞在費七五〇ドル。

エントリイ送先

U.S.S.R, Moscow, G-69, Skat-tuy Per. 4

Administration of the International Mountaineering Camps.

仮申請必要事項
 山岳団体の名称
 登山隊の隊長名及び連絡先
 参加人数
 希望山域（バミール1または2。コ
 1カサス1または2）



カット/山里寿男

— 尋ね人 —

会員番号一八〇六・二八〇六・三八
 〇六番の方、近況をお知らせ下さいま
 せ。

数年前の年次晩餐会で、会員番号八
 〇六番の野口末延様が永年会員に推挙
 されました。その時に、ちょうど私と
 四〇〇〇番ちがうことがわかりまし
 て、お祝いのご挨拶と共にそのことを
 申し上げましたら、大先輩は以後それ
 をよく覚えていて下さり、お目にかか
 ると、そう仰言って声を掛けて下さい
 ました。

それ以来、同じ系統の番号の方々
 はどなたなのかと気になりまして、探し
 てみることにしました。名簿を何度も
 繰り返して調べてみましたが、一八〇
 六・二八〇六・三八〇六番の方を見出
 すことができませんでした。

どこにどうしていらっしゃるのだし
 ょうか。51年度の年次晩餐会には皆揃
 って顔合せをしたいと願います。ぜひ
 ご協力下さいませ。

会員番号四八〇六番 吉武正子
 （神奈川県藤沢市鵠沼二三三六）